

【平成 20 年度 災害ボランティアセミナー】報告レポート

日時：平成 20 年 7 月 26 日・天竜会場：光明会館 14～ ・浜北会場：浜北高齢者ふれあい福祉センター 19～
主催：浜松市社会福祉協議会 浜北地区・天竜地区センター 浜北V連絡協議会 協力：災害V浜北・天竜定例会
記録：野本（Qポラちくおんき） 校正：立石、中村（浜松社協）

災害ボランティアセミナー

5 月に中国・四川省大地震、6 月に岩手・宮城内陸地震、今月には福島県沖・岩手県沿岸北部において連続して発生、「地震活動期の中で生活している」と言って過言ではないでしょう。

また、前回の地震から約 150 年経過、いつ起きてもおかしくない「東海・東南海地震」の発生に備え、7 月 26 日に名古屋市「NPO 法人 リスク・ストキャド」の浦野愛事務局長を迎え災害ボランティアセミナーを開催、その報告レポートを作成しましたのでご覧ください。

天竜会場 「中山間地における災害対応を考える！」

主催者あいさつ 浜松市社会福祉協議会 金森天竜地区センター長

天竜区は、地震・大雨の土砂災害により道路が遮断され各地域・集落の孤立が考えられる。また、日常から遠距離の移動が必要なため、なかなか家にたどり着かない

都会の皆さんは、そんな不便ならば移り住めば良いのでは言われるが、でも生まれたところ、愛着を考えると現実的には難しい。

幾多の災害から「顔が見える日々のつながり」、「地域のコミュニティ」の重要性が唱えられている。そのことを確認しながら浦野さんの体験談等を通じ、地域の防災力を高め、自然災害を“人災”にしないために何が必要なのか一緒に学びましょう。



参加人数：31人 スタッフ：15人

被災体験者から良く聴く言葉

まさか自分達が被災するとは思わなかった。被災することがこんなに大変なら、事前対策をしておけば良かったのに。

できるだけ自宅から離れた地域には避難したくない。自動車避難、離れの狭い空間で生活、エコノミー症候群が発生

過去の震災から考える

阪神淡路大震災の死因

家具の転倒、家屋(建物)の倒壊による圧死が死亡原因の 83.7% を占める。

要救助者 約 35,000 人。

・相互救助 27,000 人

地域住民が助け出し、8割が生存。

【地域のあり方】を考えるキッカケ

・公的救助 7,900 人

消防、警察、自衛隊による救出。

死亡率が高い、対応には限界がある。

地域のあり方を考えることが重要

- ・地域コミュニティがベースとなる。
- ・家具の転倒防止の意味 散乱、ケガの防止
- ・自分や家族の命を守る。
- ・次の行動が起こしやすい
 - ガスの元栓、電気の確認、閉める。
 - 安全・安心して避難することができる。



災害時要援護者 「だれを示しているのか」

- ・自力で安全な場所に移動・避難できない人。
 - ・情報を得ること、伝達・発信ができない人。
 - ・精神的に不安定になりやすい人。
- 健常者で考えると
耐震性の低い家に住んでいる。また、家の中の安全対策をしていない。
地震でケガをしてしまった人。
必要な物を備えていない、確保できない人。
ある特定の人の問題ではなく、自分の問題であると捉えることが大切。

災害時要援護者 「能登半島地震での対応」

日常から要援護者の「福祉マップ」を作成し、複数の民生・児童委員が情報を共有。
発災後、5時間で安否確認が終了。自主防災会と共有できていたらもっと早くできる。
事前に決めておく
早く支援（情報・物資）が届けられる体制を合意形成で作り、訓練で確認する。

新潟中越地震 川口町田麦山地区

安否確認に追われて

- 区長(自治会長)は、発災直後の住民人数(安否)確認作業に追われ、倒壊家屋からの救出・救援活動が後になってしまった。
地域で解決する力、各自の役割
- ・行政の支援を待っていないで、男性は道路作り、女性は炊き出し、老人はまき割り。自然に皆できることをやっていた。
 - ・区長は、健康状態を考え体育館(応急危険度未判定)の開放を決断する。また、建物の補強、神社の修理など「地域力」を発揮した。

子供達のストレス

指を失った少女(新潟中越地震)

- ・小学校1年生の女の子が「こたつ」で被災。倒れてきた家具に親指が挟まれ、命は助かったが千切れてしまった。
- ・精神的なダメージと一生向き合っていかなければならない。

こたつに入れない、「23」(地震の起きた日)の数字が出るとパニック、カレン

ダーが見られない。

- ・防災は自助が基本であるが、家具の固定を小学生に求めるには、当然限界がある。
- ・大人達が、家具の固定=地震(減災)対策をしていればと悔やまれる。
自宅に入れない(新潟中越沖地震)
- ・揺れが怖く、弟が自宅の中に入れない。
- ・自宅が無事でも避難先から帰れない。
- ・時間が経過すると親に甘える異常行動が、小さい兄弟より我慢していた姉に移り、目立つ。
後遺症

避難所

指定避難所(地域防災計画で位置付け)

- ・顔の知らない同士の集団。
 - ・早い段階から手厚い支援が届く。
 - ・4~5日目に疲れがピーク。
 - ・冷たい食事、環境のストレスが大きい。
 - ・役割がない。生活不活発病
- 自主避難所(地域、知縁、仲間の助け合い)
- ・顔見知りの集団。) 共通の課題 = 外国人
 - ・行政が把握・指定すること、支援が届くには時間が必要。しばらく自助による運営。
 - ・早い時期から適温食。材料、機材持ち寄り
 - ・ストレスは少なく、役割により各自が行動。中山間地) 集団避難時の留意点
 - ・道路が遮断、遠距離で指定避難所には、行けたくてもいけない。
 - ・自主避難所 気持ち安定、安心感、支える
 - ・体調を崩した人がいない = 健康維持ができる
阪神淡路大震災
 - ・毛布1枚のスペース。
 - ・早い者勝ち、要援護者への配慮を欠く。
 - ・声大きい・強い人の意見が優先。
変化してきた点
 - ・着替え場所スペース確保 安心
授乳、おむつ交換、体を拭く(衛生管理)
安心で安全な避難所の条件は何か?
 - ・困りごとを自分達で解決する力。
 - ・出来る人が、出来ること・範囲をやる。
 - ・事前に確認、話し合う。

災害ボランティア活動

ボランティアはなぜ必要か

地縁血縁だけの助け合いに限界。時代変化
当事者だけで長い復旧・復興を考えると疲れて
しまう。希望が見えない
行政は平等の原理でしか支援できない。

また、行政職員も被災者。

- ・給水車の派遣 = 行政 公助
 - ・水を配る = 地域の人、ボランティア 互助・外助
- 多様な生活スタイルへの対応
水を運びながら家の中の片付け、一時託児な
ど一人ひとりに合わせ、柔軟な対応が必要。

社会福祉協議会の役割

外部ボランティア（よそ者）

- ・地理、どこにニーズがあるか分からない。
- ・何か困っていませんか、応える人はいない。
平時から地域福祉を担っている
- ・地域の認知度
被災地において、公共性の高い組織は信頼さ
れている。
- ・困っている人がどこにいるか把握。
- ・地域内ボランティアのネットワークと連携。
災害ボランティアセンター
災害発生によりボランティアが集まる社会
現象に対応するため、社会福祉協議会が中心
に立ち上げるのがスタンダード（常識）とな
っている。

被災者の本音、顔見知り

被災者は、混乱していて本音がでない、
何に困っているか分からない、我慢して自
ら助けてと言えない。また、行動ができない。
顔見知り（被害が軽い人）

- ・知っている人が声かけを行い、相手のペース
で話を聞くと状態が分かり本音が出てくる。
- ・ニーズが分かれば次の手を打つことができる。
早く復旧・復興につながる

ボランティア、地域

外部からのボランティア

- ・気持ちが落ち着くのに時間が必要である。

- ・数日間活動し帰る一過性のボランティアは、
どうしても「何かしたい」と焦る。
- ・自分達のペースを優先・無理してしまう。
地域のボランティア
- ・センター運営の手伝い。電話、地図づくり
- ・道案内、同行して外部Vを見守る。
- ・外部Vと協力して訪問活動。
- ・地域を見守り、平時の活動を活かした支援。
地域
- ・目配り、気配り、心配りの助け合い。
- ・外部Vを上手に受け入れる機能が必要。

地域力を高めるには

災害が起こる前の取り組み

正しい知識を身につける、理解する。

- ・ハザードマップ
必要な物の備えをする。
- ・持病の薬 手に入りにくい物
避難所、避難ルートを確認する。
避難誘導方法を検討する。
- ・車椅子の体験、知識
実際に機能するか検証、改善する。

災害が起こる前の取り組み

子供と一緒に考え、体験・交流する。

- ・必要性、どうしてか、どこに 画像を利用し
てマップづくり。
おもしろ「防災」を学ぼう。
- ・要援護者と子供の交流を通じて、避難誘導を
マッチング。
- ・バスタオルで防災ずきん
頭を保護するクッションとして紙おむつを
ポケットに入れる。また、おむつは介護者だ
けでなく健常者でも使える。

災害に強いまちづくり

地域でできること、個人でできることを事前
に確認し、情報を共有する。



浜北会場 「“ 災害時 ” における足元からの “ 地域と社会の連携 ” を考える」

主催者あいさつ：浜松市社会福祉協議会 沢木浜北地区センター長

東海地震発表から 30 年を経過してもまだ発生しない。
世界又は日本国内で頻発する地震を考えると、不気味でもあり、大きい（揺れ・被害）のかと不安な気持ちになります。

今回、全国各地で支援活動をした経験を持つ浦野さんのお話から、自然又は地震災害において “ どんなことが起こりえるのか ” 一緒に考えていきたいと思います。



参加人数：71人 スタッフ：9人
天竜会場と重複する内容は省略しています。

岩手・宮城内陸地震について

宮城県栗原市の状況

- ・ 6月15日翌日には現場に入る。
- ・ 栗原市は、4年前に10市町村合併。
- ・ 被害は極小的、道路が寸断し集落が孤立。
- ・ 居住地域から離れたところで避難所生活。
- ・ 避難所は4箇所開設。内2箇所は指定避難所(行政)、行政の職員担当、充実していた。1箇所は自主避難所。給水車が配置されていた程度で他の支援はない。

避難生活

避難所の状況

- ・ 同じ被災者の若年層が炊き出しを行い、上げ膳・据え膳で高齢者のやること(役割)が無い。
- ・ また、健康が維持できない。(運動不足)
- ・ 先は不安、見通しが無いのでしんどい。
- ・ 心細さ、不安、心のよりどころがない。気持ちが楽しめるもの、元気になれない。
- ・ ゴザ敷きから、ふとん・畳が入る。限定された被災地、避難所数だから対応。

トイレの問題

- ・ 仮設トイレは屋外式和式トイレ。
- ・ 気づいた人が対応するしかない。
人がつくように行政職員に依頼。

洋式のポータブルトイレを用意。

災害対策本部に社協を経由して依頼

洋式トイレにゴミ袋、新聞紙を入れて可燃ごみとして処理。 事前の知恵が必要
環境の改善

- ・ 寝るところ食べるところが一緒
- ・ 不衛生であり、動かない環境。
- ・ 長テーブルで食事場所を作る。
事前の合意形成
)「机より人を入れろ」の意見が存在
- ・ 着替える場所
) 体をふく、授乳、おむつ
マスコミの速さが目立つ
- ・ 同じことを何度も聞かれる、疲れる。
- ・ 最初は興奮して応える、だんだん人見知り。



地域のボランティア

地元のボランティア緊急会議開催

- ・同じ被災者だが被災当事者ではない。
- ・地域でできる支援は、何かできないか。
 - 送迎ボランティア、 ペット預かり（避難所に持ち込めない、アレルギー）、 肩もみ マッサージ、 家の片付け、 お茶のみ会、 メッセージを届ける（想いを届ける）、 物理的 na 満足だけでなく、精神的な支援が必要（明日もがんばれる、気力、希望）
- 近所の人、顔が見える関係
 - 家の中に入れることに抵抗感が少ない
 - 学童保育 メッセージを掲示する
 - タオルの人形づくり 高齢者の仕事
- 外部のボランティアとの協力
 - 足湯隊（よそ者ボランティアとの交流）
- ・被災者には小さい活動であるが、 ストレス解消、 視線が同じになる、 温まる血行がよくなる、 スキンシップ（心が近づく） 想いを話す機会となった。
 - 情報を発信できない、我慢、声が埋もれている。つぶやきを言えない人もいる。
 - 直接的に解決できなくても、言葉にすることで心の解消、次の手が打てる。
 - 地域の人だけでは限界。よそ者を活用することで幅広くなる。

能登半島地震の支援から

石川県穴水町を支援する

- ・輪島市門前町のマスコミ報道が中心。
- ・人の目が届かない地域への支援を行う。
- ・住宅被害があり、避難所 3 箇所開設
- ・昭和 5 6 年前の家が倒壊している。

地域の連携

民生・児童委員

- ・安否確認しながら声かけを行い、どうゆうお手伝いが必要か、ニーズ情報を収集。

- ・それが災害ボランティアセンターに届く。
- ・情報を整理し災害対策本部にもつなげる。
 - 被災者の声がつながる 連携
 - 地域のおばちゃん
- ・よそ者に対しての不安感や体力の低下にともなうて気力が低下し家の中の片付けができない。
- ・近所のおばちゃんの「一言アドバイス」により、やっとボランティアを受け入れることが出来た。
 - 寝る場所の確保、 携帯コンロを設置して自宅生活の希望にもつながる。
 - 信頼感
 - 外部ボランティアだけでは時間・積み上げが必要。地域で顔がつながっている人からの働きかけにより解消できる。
 - センターの運営
- ・社協職員だけでは回らない
 - 被災者やニーズ数が多いので応援団が必要。
- ・地元の人（地理、方言、信用）
 - 地図づくり、電話の受付



地域主体の活動へ

被災者・避難所声かけ隊

- ・若年層は力があるので自立していくが、高齢者・障害者は取り残される。
- ・センター運営の間接的な活動から、そのような声にならない声を拾い（本音）聞く直接的な活動へ変化。

世代を超えた助け合い

- ・ 高校生：応援横断幕。
- ・ 中学生：家の片付け。
- ・ 小学生：合唱、元気を伝える。

息の長い支援

- ・ 仮設住宅が減っていく。
- ・ その存在を忘れられるのでは、孤独感、不安をなくす。
- ・ 地域一体となった助け合い。



ふりかえり

支援の全ては被災者の声である、声を聞く信頼関係が必要となる、地域の人が動く。きっかけ、工夫を日常から考える得意分野が必要とされる、災害時に役立つ。日常の延長であり気づいてほしい。何かしたいという気持ちを行動につなげる力を日常からつける。

ネットワーク横連携

社協、行政、ボランティア、よそ者 連携しないと支援が上手くいかない。相互に理解をしておく。

スタッフから

地震の場合はボランティアが来るのは2～3日目、又は責任問題があるので危険がある余震が収まった後。水害の場合は水が引いた後になる。それまでは地域の相互救助・支援が必要であり、自主防災会を機能させることが重要です。

その後、復旧・復興期においては、会社社会が優先されるので、被災者及び当事者による地域社会の助け合いには限界があると考えます。

したがって、外部ボランティアと地域をつなげ、受け入れる考え方、スキーム（仕組み）の必要性を再認識しました。

今時点の市社協は外部からのボランティアを受け入れる体制づくりに取りかかっているのが現状だが、早急にも地域での理解を広げる動きを進める必要があると認識した。

今回、民児協や日赤奉仕団など地域での支援者になる方にも多く参加していただけたので、今回得た情報や知識などを参考に関わりを持たせていき、来年度からの地域福祉活動計画の中に反映させることができると考えている。

今回、被災後の大変さと事前の減災に向けた取り組みの大切さが参加者に認識された。また今後、地域で活動する上でのヒントになる事例も多くあった。これらを踏まえて、社協としては地区社協や自治会の活動に取り入れてもらいながら、多くの住民に災害とボランティア活動についての理解を得て、上手く外助を活かせるようにしていきたい。

被災地では予想外の問題や課題が発生し、そのひとつひとつに迅速に対応しなければなりません。その問題に対応するためには、やはり顔の見える関係作り、防災訓練など日頃の活動が基盤となるということを改めて感じました。